

「メディア批評」を読む

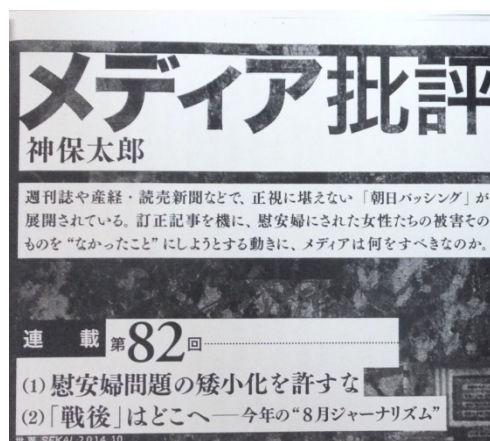
学生の頃から岩波書店の月刊誌『世界』を愛読している。読み応えのある論文が多く、じっくり読むことにしている。最新10月号特集は「生きつづけられる地方都市」であり、タイムリーな企画である。狭い視野をすこしでも広げるため、『世界』で「世界」を私なりに見つめていきたい。



特集企画とともに、毎号最初に必ず目を通すのが神保太郎「メディア批評」だ。長期にわたる連載であり、このところ2本のテーマで構成されており、第82回は「慰安婦問題の矮小化を許すな」と『戦後』はどこへ—今年の“8月ジャーナリズム”」である。

『ジャーナリスト』8月号で書いたテーマ・内容と重なるところも多く、いつも以上に丁寧に読んだ。ポイントを紹介しておこう。

異様なほどの「朝日バッシング」を考えるうえで、元NHKディレクターで現アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)館長の池田恵理子氏に、今回の事態に関する見解を求めた。①「強制連行の有無」が慰安婦問題の本質なのか、②(国連人権委員会の)クマラスワミ報告に引用されたことなどが原因で、強制連行があったとの「誤解」が拡大したといえるのか、③吉田証言が虚偽だったことで、河野談話の根拠はなくなったのか、の三点。いずれも核心にふれる質問である。



①については、「強制性」に暴力的な要素があったかどうかではない。②③についても、否定的な回答であった。朝日の今回の記事取り消しを「てこ」に、慰安婦問題自体があたかもなかったことにしようとの思惑が透けて見える。今年7月の国連自由権規約委員会の勧告をもとに、慰安婦問題の矮小化を許さないことが大切だ。

もう一つのテーマである「戦後はどこへ」では、まず「コピペ原稿棒読み」に脱力として、安倍首相の姿勢を厳しく批判する。そして「始まったカウントダウン」として、次のように警告する。

来年、「戦後70年」がやってくる。メディアはその前に、今年の“8月ジャーナリズム”に潜む自らの弱点や欠陥を克服する準備を整えておかないと、かつて自分たちが国家と戦争に屈し、時国民と近隣諸国の市民とを苦しめる手伝いをしたのと同じ道に、足を踏み入れてしまうおそれがある。

(2014年9月13日)